地元でかかりつけ医を持とう!

～在宅診療のすすめ～

7月21日、奥越地域地場産業振興センターにおいて、地域医療推進シンポジウムを開催しました。市民など約300人が参加し、おおい町国保名田庄診療所の中村 伸一所長の講演や、医療関係者などによるパネルディスカッションが行われました。

中村氏は講演の中で、「在宅での治療によって患者にとって素敵な最期を迎えることができた」という症例をいくつか紹介し、在宅診療の大切さを語りました。

「病院信仰」の患者

私が名田庄診療所（以下、診療所）に赴任したばかりのころは、患者は診療所より遠いところの「病院」で診てもらうことを望んでいました。

心臓病の薬を処方することがあり、病院で出す薬も診療所で出す薬も同じであるにもかかわらず、その患者はわざわざ車で25分かかる公立小浜病院まで取りに行ったのです。

医療と介護が連携していれば

私が診てきた患者の中で、こんな老夫婦がいました。

夫が小浜病院に入院することになったとき、妻一人を家に残してはおけないということで、妻は京都に住む息子のところに引き取られました。

退院後、私はその方はまた妻と二人で暮らしているものだと思っていました。ところが、妻は至れり尽くせりの息子のところを離れることができず、しかし息子は二人も一緒に引き取ることはできないということで、夫は施設に入ることになりました。

もし、今のように医療と介護が連携できていれば、この夫婦は、ばらばらにならずにすんだかもしれません。

在宅治療で寿命が延びて

ガンで余命数か月であるにもかかわらず、入院ではなく在宅治療を選び、その結果、余命以上長く生きることができ、最期を迎えるまでの間、家族とお別れのときを十分に過ごすことができた患者もいました。

地域の方々に支えられて

平成17年から診療所の常勤医師は私だけとなり、精神的にも身体的にも大変でした。

そういった中で、私は「慢性硬膜下血腫」で倒れ、一時は生死をさまよいました。

なんとか一命を取りとめ、その後診療所に復帰しましたが、私の体調を気遣い、患者が自然と夜間診療などを控えてくれるようになりました。

そこで初めて「私は地域の方々に支えられて医師として働けている」と感じたのです。

相互の信頼が大切

今の医療現場では、患者側は「何かあったら訴えてやる」、医療側は自分たちを守る手立てに走るということが起こっています。

しかし、これでは医療は良くなりません。患者や地域との相互信頼が、医療では大切なのです。

中村　伸一 氏

おおい町国保名田庄診療所　所長
自治医科大学地域医療学臨床教授

旧三国町出身。平成元年に自治医科大学を卒業後、福井県立病院に勤務するが、同３年に国保名田庄診療所に赴任。5年間勤務した後、福井県立病院に戻るが、同10年、再び国保名田庄診療所に所長として戻り、現在に至る。

パネルディスカッション

テーマ
『勝山市の医療の現状と今後について』

■コーディネーター
中村　伸一 氏

■パネリスト
若林　正三郎 氏（勝山市医師会会長）
藤田　学 氏（福井社会保険病院副院長）
竹島　多恵子 氏（市民代表）
山岸　正裕 氏（勝山市長）

県内に4つある二次医療圏の見直しが進められている中で、入院患者の流出が大きい奥越地域が福井・坂井地域に統合される可能性が高い現状から（広報かつやま7月号参照）、山岸市長は「もし統合されてしまうと、医療圏内で分娩施設が確保されたことになり、奥越での分娩再開はより一層難しくなる」と話し、勝山市医師会の若林会長は「統合が行われると、病床数が地方から都市部に流れるなど、都市部に有利に働く。また、医師数、医療サービス体制が最もぜい弱な地域であるという奥越の医療課題が隠されてしまう」と危機感を募らせました。

その他、初診から圏外の大病院にかかる場合が多く、それが患者流出の一因と考えられることから、まずは地元のかかりつけ医で診てもらい、入院などが必要な場合には、拠点病院の社会保険病院にかかるなど、「奥越地域で完結する受診行動が大切である」と、パネリストは参加者に呼びかけていました。

社会保険病院の藤田副院長は、社会保険病院の利用状況などを説明し、「医師を確保し、大規模病院やかかりつけ医との連携を充実させていきたい」と話しました。

竹島氏は討論の中で、自身の体験談から社会保険病院の必要性を強く訴えました。

■竹島氏の話

高校卒業後、京都に30年移り住み、その後、両親の待つ勝山に戻りました。それから20年の間に夫は2度、病院で命を救われました。夜中に激しい腹痛に襲われたとき、夜中にもかかわらず大勢のスタッフが駆けつけ、昼間同然のような緊急体勢で処置していただきました。都会にいたら、こうはいかなかったかもしれません。

もし社会保険病院が無くなったら、この町はどうなってしまうでしょうか。過疎化がますます進んでしまうかもしれません。

患者が少なく、採算が取れなければ、奥越に病院は不要と判断されてしまうのです。病院を残すためにも、地元の病院にかかり、患者の流出を防がなければなりません。社会保険病院は、私たちや子、孫たちが勝山で生きていくための最低の保障なのです。

いつまでもあると思うな
「親」と「病院」

■まとめ（中村氏の話）

電力不足になった場合、私たちは、電力会社に「もっと電気をつくれ」と文句を言うより、進んで節電に心がける方が多いと思います。

では、医師不足になった場合はどうでしょうか。ただ「医師を増やしてくれ」と病院に文句を言っていませんか。

それよりも、病気にならないように予防することはもちろんですが、地域で医師を育てること、また受診行動を自ら考えることが大切だと思いますね。